

目 次

<はじめに>

FD 講演会報告 ----- 1

FD の効果判定に関して ----- 12

FD の現状とこれからの FD に向けて ----- 14

学外 FD 研修会報告 ----- 15

【編集後記】

《はじめに》

現代社会は少子高齢化、グローバル化、価値観の多様化とともに、環境や倫理、教育、労働、医療等において多様な課題を抱えています。それらの課題に適応するべく、大学教育も各大学で改革が進められております。

我が弘前大学は地方に位置しており、卒業後に都会に出ていく多くの若者を抱え、学部改組や教育改革を基に地域で活躍する人材育成という大きな役割も担っております。我々教員は教育、研究を通して、学ぶ力、教育する力とともに課題を見つけ解決できる人材の育成に日々努力をしております。我々FD委員会も、教員個々のFD活動を教員間あるいは教員と学生とで共有し相互に高め合うことを願い、活動してきました。その成果を「平成28・29年度FD活動報告書」にまとめましたので、今後の皆様方のFD活動に少しでもお役に立てればと思っております。

平成28年度FD委員

委員名	代表所属
則包 和也	保健学研究科 看護学領域
佐藤 真由美	保健学研究科 看護学領域
敦賀 英知	保健学研究科 放射線技術科学領域
工藤 幸清	保健学研究科 放射線技術科学領域
石川 孝	保健学研究科 生体検査科学領域
七島 直樹	保健学研究科 生体検査科学領域
高見 彰淑	保健学研究科 総合リハビリテーション科学領域
澄川 幸志	保健学研究科 総合リハビリテーション科学領域
廣田 淳一	保健学研究科 学事委員会
大津 美香	保健学科 学務委員会

平成29年度FD委員

委員名	代表所属
則包 和也	保健学研究科 看護学領域
佐藤 真由美	保健学研究科 看護学領域
敦賀 英知	保健学研究科 放射線技術科学領域
工藤 幸清	保健学研究科 放射線技術科学領域
石川 孝	保健学研究科 生体検査科学領域
七島 直樹	保健学研究科 生体検査科学領域
高見 彰淑	保健学研究科 総合リハビリテーション科学領域
澄川 幸志	保健学研究科 総合リハビリテーション科学領域
廣田 淳一	保健学研究科 学事委員会
加藤 拓彦	保健学科 学務委員会

平成 28 年度 FD 講演会

平成 28 年度 FD 講演会

本年度の FD 講演会では、小林浩先生を講師としてお招きすることができた。小林先生は、株式会社リクルートに入社後、文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会委員、文部科学省高大接続システム改革会議委員などをご歴任され、現在は文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会専門委員として教育政策提言の策定にかかわっている。このようなご経歴を背景とした貴重なお話や裏話がふんだんに盛り込まれた今回の講演会は、これからの入学試験の有り様だけではなく、大学が社会でどのような役割りを担うのかについて新たな視点をもって考えることの必要性が強調された。

日時：平成 28 年 12 月 1 日（木）18：00～19：50

場所：保健学研究科総合研究棟 6 階 第 63 講義室

講師：小林 浩先生 リクルート進学総研所長、リクルート「カレッジマネジメント」編集長

テーマ：高大接続改革の狙いと方向性～高校・大学・入学者選抜はどう変わるのか～

参加者：23 名

講師ご略歴

株式会社リクルート入社後、グループ統括業務を担当、「ケイコとマナブ」企画業務を経て、大学・専門学校の学生募集広報などを担当。経済同友会に出向し、教育政策提言の策定にかかわる。その後、経営企画室、コーポレートコミュニケーション室、会長秘書、特別顧問政策秘書、進学カンパニー・ソリューション推進室長などを経て 2007 年より現職。

月刊『広報会議』にて「外から見た大学」連載（2009～2013 年）

文部科学省「熟議に基づく政策形成の在り方に関する懇談会」委員（2009～2011 年）

文部科学省「大学ポートレート（仮称）準備委員会」委員（2012～2014 年）

文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会臨時委員（2012 年～2014 年）

文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ臨時委員（2013～2014 年）

文部科学省専修学校生への経済的支援の在り方に関する検討会委員（2014 年～）

文部科学省高大接続システム改革会議委員（2015～2016 年）

文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会専門委員（2016 年～）

文部科学省「これからの専修学校教育の振興のあり方検討会議」委員（2016 年～）

平成28年度FD委員会講演会

高大接続改革の狙いと方向性
～高校・大学・入学者選抜は
どう変わるのか～

日時：12月1日（木）18：00～19：50
場所：弘前大学医学部保健学科 63 講義室

参加費無料
事前申込不要

講師：小林 浩氏
リクルート進学総研所長
リクルート「カレッジマネジメント」編集長

◇プログラム◇
17：40 開場
18：00 開会挨拶 研究科長：木田和幸
18：05～19：50 講演（質疑応答含む）

【主催】弘前大学大学院保健学研究科FD委員会

28 年度 FD 講演会ポスター

講演内容

- ・近年、グローバル化等の社会環境の大きな変化に伴って、必要な能力・資質が変化している。従来は均質的で、正解を早く効率的に導き出す能力が求められていたが、今後は、正解のない中で主体的に問題に取り組み、生涯学び続ける能力が必要となることが予想される。それを踏まえ、政府は高等学校教育と大学教育、および大学入学者選抜の 3 つを、一貫した理念のもと一体的かつ抜本的に改革を行うことを提言した。直近では 2019 年の大学入試センター試験を廃止し「思考力・判断力・表現力」を評価する新テスト「大学入試希望者学力評価テスト（仮）」の導入が予定されている。
- ・このような改革は、単に入試改革だけではなく、以下の 4 つのポイントを視野に入れたものである。すなわち①教育課程の見直し高等学校学習指導要領の改訂、②学習・指導方法の改善と教員の指導力の向上、③多面的な評価の充実、④「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入である。①においては、新しい時代に必要となる資質能力の育成の視点による必修科目の見直しが行われ、②では、アクティブラーニングの視点からの授業改善、および、教員の養成・採用・研修の各段階を通じた抜本的な改革が行われる予定である。③では、「学力の 3 要素」を育成するための、学習評価の在り方の見直しと指導要録の改善が掲げられ、④では、高校段階における基礎学力の確実な習得とそれによる高校生の学習意欲の喚起を目標としている。つまり、何を、どのように学ぶのかについて具体的な見直しが求められているのである。
- ・大学教育改革のポイントは、①3 つの方針の策定に基づく大学教育の実現、②認証評価制度の改革の 2 つである。①について、「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）、「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の 3 つの方針の一体的な策定と公表を行うことが示されている。すなわち大学が、どのような学生に来て欲しいのか？どんな理念に基づき、どんな教育の仕組みがあるのか？卒業時に何ができるようになるのか？について明確なビジョンを持っておかなければならないということである。
- ・大学入学者選抜の改革については①大学入学者選抜改革の基本的な考え方の確認、②個別大学における入学者選抜改革、③「大学入学者希望者学力評価テスト（仮称）」の導入の 3 つのポイントが示された。

すなわち、①では「学力の 3 要素」の育成に向けて、高等学校における指導の在り方の本質的な改善

を促し、また、大学教育との質的転換を大きく加速し、改革の好循環をもたらすものとなるよう、個別大学の入学者選抜と大学入学者選抜における共通テストの双方について改善を進める必要性が示された。②では「学力の 3 要素」を多面的・総合的に評価するものに転換し、AO・推薦・一般の入試区分の見直しをする必要性と各大学が「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）を明らかにし、それを具現化する入学者選抜

方法を実現する必要が示された。③では「知識・技能」を基盤とした「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するテストを創設し、各大学の利活用を促進する必要性が示された。知識・技能に基づいた思考力・判断力・表現力と主体性・多義性・協働性を、様々な形式（解答の自由度の高い記述式論文、調査書、活動報告書、面接、集団討論、プレゼンテーション等）で評価して選抜を行うことが示されている。

- ・大学入学者選抜改革の具体的な動向については“各大学は求める人材像のみならず、各大学の入学者選抜の設計図として必要な事項を示すことが必要”として、アドミッション・ポリシーに盛り込むべきポイントが2015年3月に示された。すなわち、①各大学の強み、特色や社会的な役割を踏まえつつ、

大学教育を通じてどのような力を発展・向上させるのか②入学者に求める能力は何か③入学者選抜で高等学校までに培ってきたどのような力を、どのように評価するのかの3つである。このような流れのなかで、各大学で大学入試の改革がすでに急速に進みつつある現状が以下のように紹介された。

□東京大学 目的：「世界的視野をもった市民的エリート」育成のために、多様な学生が互いに切磋琢磨する環境を作る＝多様性の確保

選考：書類審査→面接→基礎学力判定（センター試験）

□京都大学 目的：研究型大学として京大が重視する「自ら課題を発見し、チャレンジする」という自発的・能動的学びのポテンシャルがある人材を登用する。高等学校段階までに育成されている学ぶ力及び学部の教育を受けるにふさわしい能力並びに志を総合的に評価

対象：各学部に設定された「求める人材像」に合う生徒合計100名（定員は学部ごとに異なる）

選考：調査書・学業活動報告書・まなびの設計書審査→面接・筆記検査・口頭試問

2016年度入試より後期日程（定員100名）を廃止前期日程試験前に推薦入試（定員100名）を設置 テストで高得点をとるためだけの受験勉強を疑問視 2016年度入試より「京都大学特色入試」実施

□東北大学 目的：基礎学力重視（一般入試を最終目標に基礎学力の習得に集中できる）、第一志望者に機会を提供（自己省察に絶好の機会）

選考：基礎学力：高校学業成績（Ⅱ期全学部、Ⅲ期法）、小論文・筆記試験（Ⅱ期全学部、Ⅲ期医、工）、センター試験（Ⅲ期全学部）＋α（意欲・適正・好奇心：志願理由書、活動報告書、面接試験、志願者評価書 ※①特別な対策は不要②第一志望率95%

③ストレート卒業率、GPAともに高い⇒定員規模の18%を数年かけて30%にAO入試：各学部のアドミッション・ポリシーに基づく選考⇒「基礎学力＋α（意欲・適正・好奇心）」導入

*上記は一例であり、講演では様々な方法で実施されている独創的な入学試験がたくさん紹介された。

・まとめ

今大学に求められているものは何だろうかという自問を繰り返しながら、小林先生の言葉に深く耳を傾けた貴重な時間であった。求められるもの、それは、学生が大学生活で「どのような経験を経て」、「何ができるようになって」、「それが客観的に説明できるか」というプロセスを経ることを、さらには、グローバルな時代に対応可能な個性的な人間となることを目標として、促したり、背中を押したり、見守ったりすることなのだとして強く認識するに至った。教育者は学生に個性を求める。しかし、教育者の所属する大学もまた、個性を求められる時代となっているのだ。この視点を決して忘れないようにしたい。



活発な質疑応答が行われた会場



わかりやすいスライドを使って説明する小林先生

H28 年度 FD 講演会アンケート結果

参加者数 33 名、アンケート回収 23 名（回収率 69.7%）。

質問1-1(択一)		
ご自身について教えてください。	回答数	割合(%)
1.看護学領域	9	39.1
2.放射線技術科学領域	2	8.7
3.生体検査科学領域	7	30.4
4.総合リハビリテーション科学領域	5	21.7
5.その他	0	0

質問1-2(択一)		
参加動機	回答数	割合(%)
1.講師に関心があった	1	4.3
2.テーマに関心があった	22	95.7
3.その他	0	0

質問2(択一)		
講演の内容はいかがでしたか？	回答数	割合(%)
1.大変よかった	18	78.3
2.よかった	5	21.7
3.あまりよくなかった	0	0
4.よくなかった	0	0

質問3

当日の運営(案内、会場、その他)について、お気づきの点がございましたらご記入ください

- 1 いい企画なのに参加者が少ないのが残念でした。
- 2 もっとたくさんの方に参加していただきたい内容でした。

質問4

講演のご感想や、講演者へのメッセージがありましたら、ご記入ください。

- 1 大変興味深い内容だった。
- 2 頭の整理ができて大変よかったです。
- 3 わかりやすい講演でした。
本学もDP、CP、APを考えて、本気で生きのこることを考えていかなければならないと思いました。
- 4 2時間と長い講演でしたが、内容の濃い話を時間を感じず、あきることなく楽しく聞くことができました。入試を含めた大学教育の方向性等をわかりやすく解説して頂き、ためになりました。
- 5 生意気なことを申せば、高大接続改革は実際に教育にたずさわったことのない人たちが造り上げたもののように感じました。高校の先生方の能力も多様な中で、盛り込まれた内容を子供たちに教授するのは至難のわざのように思えます。私は大学というところは、人間力を養うところだと思います。学問について言えば、大学教員は学問を教えるのではなく、学問のトビラを開けてあげるのが仕事だと思います。
- 6 現状や今後の動向、課題など大変わかりやすく、また来ていただきたいと思いました。ありがとうございました。
- 7 大学をとりまく状況がわかった。
- 8 大学生の教育や対応でかなりの時間をさいているが、さらに、高校生、卒後の就職先との連携のためにさまざまな対応を求められ、研究を推進することがどこまで可能なのか、ワークバランスが今後ますますとりにくくなるという不安が増えた気がしました。さらに高校生からみると、早めに対応をせまられる、全国にたくさんある大学に入学したいと思う高校生は進学させることができない。実施環境にますますつらい思いをするのだったと思いました。

質問5

今後、FD講演会で行って欲しい企画がございましたら、ご記入ください。

- 1 今後はSDIになるということですね。
- 2 講師の先生、講演の内容はとてもよかったです。
- 3 数年後にまた来ていただいて、その後の経過や展望を聞きたい。
- 4 ルーブリックの作り方やツールについて
- 5 今日の講演に参加者が少なすぎなので、もう一度、企画して欲しいです。

平成 29 年度 FD 講演会

平成 29 年度 FD 講演会

本年度の FD 講演会は、前年度に引き続き、小林浩先生を講師としてお迎えしました。再び、小林先生に依頼した理由は、前回のテーマ「高大接続改革の狙いと方向性 - 高校・大学・入学者選抜はどう変わるのか -」での講演が、非常に好評であり、文科省の数々の委員を歴任されているからこそその貴重なお話や裏話が、大変興味深いものであったからです。

今回のテーマは「これからの大学に求められるもの」として、大学教育がどのように変わっていくのかを含めてご教示いただきました。講演はわかりやすい口調とテンポの良い語り口により、また内容が大学教育の質的転換に関するものであることから、参加された多くの教員が関心を持って聞き入っていたことが印象的でした。

日時：平成 29 年 12 月 4 日（月）18：00～19：40

場所：保健学研究科総合研究棟 6 階 63 講義室

講師：リクルート進学総研所長

小林 浩 先生

テーマ：これからの大学に求められるもの

参加者：21 名

講演内容

- ・教育改革の最新動向、新しい時代に向けた教育改革の動向

ここ数年、大学の教職員から大学入学者層が変化しているのでは？企業の人事から大卒者の質が低下しているのでは？という疑問がよく聞かれる。1990 年に比べ 2017 年では、18 歳人口は 4 割減（約 120 万人）、大学数が約 1.5 倍（780 校）、大学進学率は約 2 倍（52.6%）、学士の学位に付記する専攻分野名称数が約 24 倍（約 700 種類）と変化しており、少子化のなかでの高等教育の量的拡大がある一方で、大学教育・研究の質が担保、保証されているのかという問題に対して教育改革の必要性が指摘された。また、「人生 100 年時代構想会議」の具体的なテーマには、何歳になっても学び直しができるリカレント教育、これまでの若い学生を対象にした一般教養の提供では社会のニーズに応えられないのではないかという課題に対応した高等教育改革などが示された。

- ・高校・大学・大学入学者選抜の一体的な改革の方向性、変わる高校、受け入れる側の大学

平成29年度FD委員会講演会

これからの大学 に求められるもの

日時：12月4日（月）18：00～19：40
場所：弘前大学大学院保健学研究科 63 講義室

参加費無料
事前申込不要

講師：小林 浩 氏
リクルート進学総研所長
「カレッジマネジメント」編集長

◇プログラム◇
17：40 開場
18：00 開会挨拶 研究科長：木田和幸
18：05～19：40 講演（質疑応答含む）

【主催】弘前大学大学院保健学研究科FD委員会

身につけるべき力、学力の3要素は、(1)知識・技能、(2)思考力・判断力・表現力等の能力、(3)主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度であり、これらの能力を身につけさせるために、①高等学校教育、②大学教育、③大学入学者選抜の3つを、一体的に改革を行うことが高大接続改革である。入学者選抜を変えることで、高校までの教育を変えていくことが狙いである。つまり高大接続改革の目的は入試改革ではなく高校教育・大学教育・大学入学者選抜の三位一体となった教育改革である。

・大学入学者選抜改革の動向、すでに動き出した入学者選抜

大学入学共通テストが平成32年度に導入される。択一問題のみではなく記述式問題が導入される。まずは国語・数学でいずれも3問程度、平成36年度からは地歴公民、理科分野等でも記述式導入が検討されている。英語は現行の「読む」「聞く」から「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能を評価する。個別選抜では、AO・推薦・一般、すべての入試区分で各大学のアドミッション・ポリシーに基づき学力の3要素を多面的・総合的に評価する。既に進んでいる個別選抜改革として、京都大学特色入試、お茶の水女子大学の新フンボルト入試、島根大学の地域貢献人材育成型入試、東洋大学のWeb体験授業型入試（自宅受験可）等が挙げられる。これまでのような知識偏重型の入試対策だけでない、学力の3要素を求めるものが徐々に浸透していく。

・高等教育という成熟マーケットにおける大学経営、個性輝く学校づくりに向けた組織力の強化

18歳人口は非婚化・少子化で団塊ジュニア・ジュニアの増加がなく2030年頃には100万人を切るまでに減少、これは定員500人規模の大学が200校なくなるくらいのインパクト、さらに2040年には90万人を切ると推計されている。2025年のマクロ環境変化と高等教育機関への影響として、成長分野の取り込み、グローバル化に対応できる人材の育成、女性の就労増加による就学機会の拡大、アジアからの留学生受け入れ、社会人の学び直し機会などが挙げられる。これらの観点から独自性（個性）が好循環する大学になるために、高等教育という成熟マーケットにおける戦略立案としてS・T・Pを考える。Segmentation⇒どのセグメントで（グローバル、ローカル、資格取得、就職等）、Targeting⇒誰を対象として（広島県、中四国、西日本、日本、アジア等）、Positioning⇒どんな個性で競合と差別化するのか。S・T・Pができていることが好循環の前提条件となり、大学は、正課・正課外を通じて、大学全体で学生を育て、断続的に、社会に送り出すことが求められている。

・ユニバーサル化時代の大学改革の方向性とは、問われるのは学習成果（インプットからアウトカムへ）

グローバル化を牽引する大学、地域の中核となる大学、専門分野に特化した個性ある大学、という大学のユニバーサル化時代となる。ユニバーサル化時代の人材育成の方向性は、正解のない時代へチャレンジできる人材の育成であり、教授が何を教えたか（input重視）ではなく、学生が何を学んだか、何ができるようになったか（outcomes重視）が

問われる。日本は「入学の国」から「卒業の国」実現に向けての大きなプロセスの中にある。学校がどのような人材育成をするのかのコミットメントはあるか。本学を卒業すると何ができるようになるのか、どんな人物を社会に送り出すのか<ディプロマ・ポリシー>、それができるのは、どんな理念・教育の仕組みがあるのか<カリキュラム・ポリシー>、そのためには、どんな志向や意欲をもった学生に来てほしいのか<アドミッション・ポリシー>が求められる。



H29 年度 FD 講演会アンケート結果

参加者数 21 名、アンケート回収 21 名（回収率 100%）。

質問1-1(択一)		
ご自身について教えてください。	回答数	割合(%)
1.看護学領域	7	33.3
2.放射線技術科学領域	2	9.5
3.生体検査科学領域	5	23.8
4.総合リハビリテーション科学領域	5	23.8
5.その他	2	9.5

質問1-2(択一)		
参加動機	回答数	割合(%)
1.講師に関心があった	6	28.6
2.テーマに関心があった	12	57.1
3.その他	3	14.3

質問2(択一)		
講演の内容はいかがでしたか？	回答数	割合(%)
1.大変よかった	15	71.4
2.よかった	5	23.8
3.あまりよくなかった	0	0
4.よくなかった	0	0

質問3	
当日の運営(案内、会場、その他)について、お気づきの点がございましたらご記入ください。	
1 なし	
2 教員の出席が少なく残念である。	
3 特にありません。	
4 FDの全体へのお知らせを見落としていたのかもしれませんが、もう少し前にアナウンスをされれば参加者が集まったでしょうか？	

質問4

講演のご感想や、講演者へのメッセージがありましたら、ご記入ください、

- 1 将来の大学の在り方について考える貴重な機会となりました。
改革の必要性について勉強していきたいと思いました。
- 2 わかりやすく有意義でした。
- 3 最新の情報を聞くことができ、参考になりました。
入学者を受け入れる大学も大変な時代が来るなあと感じました。
- 4 非常にためになる講演内容でした。
興味深い点が満載で感謝いたします。
- 5 大変わかりやすい講演でした。
ありがとうございました。
- 6 ・大学あげて危機感を持つ必要性を強くもちます。
・高校の受験体制(合格率アップ)中心の状況がどれ位、改革するのか？同時に保護者の要求で入る学生は、意思がうすいので、途中でやめる／ついていけない学生がいるのか？とても気になるこの頃です。

質問5

今後、FD講演会で行って欲しい企画がございましたら、ご記入ください。

- 1 カリキュラム評価について
- 2 やはりより多くの教員に聴いてほしい。
学長他の中枢に聴いてほしい。

FD の効果判定に関して

FD (ファカルティ・ディベロップメント) は、伝統的な押しつけ主義の授業内容を改善するため、カリキュラムや組織改革を含む教育改善の取り組みであることは間違いない。特に、大学や大学院などの高等教育機関では、専門分野とする研究内容の業務も重要であるため、学生に対する教育としては、どうしても授業時間を費やすだけの一方向的な面が少なくとも存在することが課題として指摘されてきた。それを改善すべく出てきた概念で、組織的に教員の教育法改善への取り組みを行うよう、近年では委員会等の設置が必須事項となっている。

新堀(1993)によると、教員の資質向上の実施および能力の開発には、四つの因子があり(1)専門職開発(Professional Development)、(2)授業開発(Instructional Development)、(3)カリキュラム開発(Curriculum Development)、(4)組織開発(Organizational Development)と述べられている。最初の若手教員にニーズが高い、専門職開発は置いておくとして、ここでは、年齢・教育歴にかかわらず共通ニーズが高い、教員の授業運営、授業手法の能力の開発、教育課程の内容・シラバスの充実であるカリキュラム開発について焦点を当てる。その中で、FD 取り組み後の「効果判定(評価)」について個人的な意見を述べていきたい。

FD の取り組みは、弘前大学保健学科を主体として考えたとき、学科内部組織と弘前大学全学組織の二段構えで、各種趣向を凝らし、アンケート調査などを参考に実施されている。授業内容の充実化を図る上での講演や演習などは実際に参加すると、メリットがたくさんある。しかし、実際の授業改善に貢献しているかどうか、信頼性における効果判定方法や評価基準が確立されているかどうかは若干不明である。FD 講演や研修自体の内容アンケートは存在するが、その効果を推し量る調査は、一つの目安でもある「学生の授業評価」にリンクされていないと思われる。

学生の授業評価アンケートは、共通項目と別に、各学科内で独自のものを作成して良いことになっている。しかし、それを作成する組織体制は学務委員会であり、FD 委員会との共同製作の機会はほとんどない。一応、メンバーを重複させている体制はとっているものの、実情は縦割りに近い。換言すれば、学生による授業評価を組織的に授業改革に利用するという点は、残念ながら反映されづらい環境にある。

それでは、FD 委員会が「学生の授業評価」に積極的に関与するだけで良いか? という点は、そのまま受け入れがたい。学生による授業評価は個別のフィードバックに過ぎず、組織としての取り組みに、あまり寄与していないとの指摘もある。また、総合点の確認はすれども、下位項目の内容までチェックし真摯に向かい合っている教員はいるだろうか。

学生の評価の付け方も、課題が残る。横断的に調査した場合、ある程度効果は判明する可能性があるが、「改善」というと縦断的にみる必要もある。例えば、シラバスの書き方に

については、書類が残るので比較しやすいが、アクティブラーニング取り組みという、目標を掲げ、研修等を開きその効果判定といわれても、その教員による改善（研修）前の授業とあとの授業を経験しないとそれは難しい。しかも、実技や実習の多い医療専門職の養成校でもある当該学科では違いがありすぎて、比べるのは難しい。そもそも、学生自体がチェックする対象（アクティブラーニングなど）を理解していないと、評価は難しいのではないかと考える。また、学生による授業評価至上主義になり、学生にすり寄る、評価項目・点数に着眼をおき偏重化するなどで、授業の硬直化いわばステレオタイプに走ることがあってはいけない。

学生による授業評価を組織的に改革に資するよう展開する必要がある、近年増えている学生が組織するFD委員会の充実化もその一つである。ピア・レビューによる、授業での意見交換や批評をすることによる試み、これも案の一つである。以前保健学科も実施していたが、参加だけでチェックリスト記入、フィードバックなどは行われていない。同僚間で授業改善の工夫や具体的手法を共有するという利点もあるので活用されたい。同僚だけではなく、第三者の目もあって良いかもしれない。ティーチング・ポートフォリオも一例となる。組織的な取り組みで、授業の記録や作成・配付資料などをまとめてもらい、できれば質疑応答記録、授業評価もまとめ、授業の進行とともに集める。それを教員業績評価者や他分野の目などで評価し、フィードバックがすすめられれば、今後の授業の展開に貴重な材料となる可能性がある。ただし、教員の同意が必要であり、実施により制約をつよく感じる場合、モチベーションが下がる可能性があるので、適切な調整が必要と思われる。

引用文献

新堀通也「ファカルティ・ディベロップメント」『大学評価-理論的考察と事例』玉川大学出版部 1993

FD の現状とこれからの FD に向けて

FD 活動に参加して思うのは、参加者が非常に少ないことです。これは大学教員にとって大学は教育機関ではなく研究機関であるという意識の表れのように感じます。また、学生による授業アンケートを実施していますが、その結果を教員自身が教育にどれくらいフィードバックさせ改善に努力しているのか不明であり、このままでは FD 活動が形式的な実践活動で終わることが懸念されてなりません。どのようにしたら教員の FD への意識・自覚を促し、自発的にスキル向上に取り組むようになるのか、そのためにはどのような環境整備や援助する仕組みが必要なのかを大学として、保健学研究科として議論する段階に来ているように思います。

一方、教育は教員と顧客である学生によって成立し、互いに相手が考えていることを理解するが教育効果の改善に寄与することが期待されることから、公開討論会等で学生と教員が互いの意見を共有し、ともに授業の改善策を話し合うことが最も良い授業につながるように思われます。

平成 28 年度学外 FD 研修

平成 28 年度の学外 FD 研修は学部教育 1 件で教員 2 名の参加であった。

研 修 会 名	第 22 回大学教育研究フォーラム
主 催	京都大学高等教育研究開発推進センター
日 時	平成 29 年 3 月 19 日 (日) 9 時 00 分～18 時 00 分 平成 29 年 3 月 20 日 (月) 10 時 00 分～15 時 50 分
場 所	京都大学 吉田南 1 号館・総合館 (北棟)、百周年時計台記念館
参 加 者	則包 和也教員 (看護学領域/看護学専攻) 澄川 幸志教員 (総合リハビリテーション科学領域/作業療法学専攻)

プログラム

3 月 1 9 日 (日)

1. 個人研究口頭発表

◎部会 1 : アクティブラーニングの質保証およびジェネリックスキル育成のためのプロジェクトマネジメント教育の現状と展望/大学のアクティブラーニング調査から見てきたこと—アクティブラーニングをカリキュラムマネジメントにいかに関位置づけるか—/被災地訪問による課題発見型アクティブラーニングで学生の「生きる力」を育む/AL ベストティーチャー表彰制度の設計と効果に関する—考察—山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の取組を通して—

◎部会 2 : 映像制作授業内でのリフレクションに注目した peer learning において他者の言動を通して再認識される自己の創造/成長と目標達成を相互支援する「コーチ型リーダー」の育成—学生同志の関わりによる自己認識・相互理解から、自己変革を生み出す授業実践と効果—/野外実習におけるアクティブラーニングが思考基幹におよぼす影響—目的の非提示による到達目標の自己探索—/卓越した学習者による問題解決時の考え方を他の学習者に移転する試み

◎部会 3 : アクティブラーニングを取り入れたキャリア理論学習の効果の検討/女子大におけるリーダーシップと PBL—EIWA プロジェクトの成果と課題—/インターンシップの中での失敗経験がインターンシップの成果に与える影響/追手門学院大学社会学部の教育の再建と体系的なキャリア教育の構築

◎部会 4 : 「文章作成支援」の一環として行った添削指導から分かる学生のルールへの適応性/大人数を対象とした文章表現教育におけるピア・レスポンスの効果/自己表現力を引き出す文章指導—専門教育と教養教育が連携した授業実践—/自己形成史におけるパーソナル・ライティングの意味—パーソナル・ライティングを経験した元学生 (当事者) への聞き取り調査から—

◎部会 5 : 大学語学教員の授業力育成のための研修プログラムの開発と考察/大学教員にとって FD とは何か—教育実践を通じた大学教員の学習プロセスの質的検討—/プレ FD

プログラム受講の効果に関する質問紙調査の質的分析／オンライン型 FD プログラムの学習継続要因の分析

◎部会 6：入学後の学修行動に影響を及ぼす要因の分析／ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーのつながりをデータに基づいて検証する／大学生は学士課程教育の経験を通してどのように成長しているのか—大阪府立大学の学生調査の分析結果を事例として—／分野別学修成果の策定と測定—哲学思想系分野を事例に—

◎部会 7：数学基礎教育における 2.5 次元デジタルテキストの活用と取り組み／自然体験や野外活動を伴った授業の教育効果／初対面状況時に対話を行うためのカードゲームについての予備調査／課題解決型授業の改善とその効果

◎部会 8：対話的評価活動を取り入れた日本語表現のテキスト分析—大学学部生を対象にして—／教員養成型 PBL 教育の課題と展望 (XIV)—ルーブリックによる評価にもとづく対話的事例シナリオの改善—／ルーブリックを活用したワークシートによる振り返りが学生の自己評価能力に与える影響—新潟大学歯学部における PBL の実践を事例として—

◎部会 9：産学・高大連携による金融経済教育と社会人基礎力育成／産官学連携教育における連携先ベネフィットと授業マネジメントを考慮したサービスデザインの活用／「非プロジェクト型」地域連携授業の実践と学生による振り返り調査の結果分析／大学生による海の家出店を通じた実践型経営教育

◎部会 10：共生日本語をめざした院生プロジェクトの評価と改善／協同学習を取り入れたリサーチリテラシー育成の試み／芝浦工業大学における自校教育「芝浦工業大学通論」に関する実践報告／アクティブラーニング型大学英語カリキュラムの独自評価指標の策定—立命館大学プロジェクト発信型英語プログラム、8 年間の取り組みに基づいて—

◎部会 11：高校生と大学生の貧困を考える—大阪府立西成高校の事例に学ぶ支援のあり方—／海外留学経験をどのように生かすか—学内での国際交流活動による学生達の実践から—／熊本市災害 VC の運営に従事することで生じた防災意識の変化プロセスについての考察／大学生と中学生がともに取り組む「15 歳の選択」の紹介

◎部会 12：ラーニングコモンズでのレファレンスサービスの効果について／「アクティブな学びの場」としてのラーニング・コモンズの現状と課題／フォトダイアリー調査からみるラーニング・コモンズ内での学習実態／大学における図書館利用教育へのゲーミフィケーションの導入

2. 個人研究ポスター発表

アクティブ・ラーニング、ルーブリック、高大連携などに関する 80 題の発表があった。

3. 特別講演

人工知能が大学入試を突破する時代、人は何をすべきか？

4. 学術セミナー

学問分野別学修成果アセスメントから学位プログラム設計へ—エキスパート・ジャッジメントによる共通性と多様性の両立—

米国における IR/IE の最新動向と日本への示唆

5. MOST フェロー発表会

「モスト DE デートー異分野コラボレーションによる共同的授業実践の創発ー」

6. シンポジウム

「アセスメント・イン・アクションー評価の新しい形ー」

3月20日（月）

1. 個人研究口頭発表

◎部会13：授業開講前の知識・経験の水準に基づく学生の類型化ー授業への期待に関する類型間比較ー／「聞くこと」と「書くこと」を前提とする従来型講義の新たな形式ー能動的な活動を伴うトレーニング型講義の可能性／LMS 等を活用した大規模講義への授業参加度を高める試み／大人数講義におけるデジタル・ストーリーテリング制作課題と動画閲覧・相互コメントツールの活用

◎部会14：アクティブラーニング導入に関する基礎的研究ー大学生の協同作業認識を参照しながらー／グローバル人材育成を目指した MOOCs x アクティブラーニング型授業開発と実施／教員養成大学における教育実習前実践活動の意義ーPBL（Project Based Learning）から「私の学びの地図」へー／数理の「深い学習」における学生の態度傾向の分析

◎部会15：全科目の平均得点と各科目の得点を学修到達度とした点双列相関係数による試験問題の評価／多くの評価者が公平公正に評価するためのルーブリック／必修 PBL 型授業の課題解決に向けたルーブリック活用の試み／ルーブリック活用による個人ポートフォリオ作成とその評価ー学生が身についたとする力ー

◎部会16：大学入学希望者学力評価テスト（仮称）「実施方針」の策定・公表を前にしてー実施可能性は、妥当性とも信頼性とも、勝るとも劣らないのではないのでしょうかー時期・経費・人出／アクティブラーニング・スペクトラムの提案／アクティブラーニングー学生主体による人型ロボット用医学英語教材の作成とその活用についてー／パイロットの視線情報を省察することによる訓練生の操縦技量の向上

◎部会17：質保証に向けた大学教育の変化と修学支援の課題（1）ー学生の能力を引き上げる米国の修学支援に学ぶー／質保証に向けた大学教育の変化と修学支援の課題（2）ー学生の能力を引き上げる米国の修学支援に学ぶー／オナーズプログラムがもたらす学士課程への教育的効果検証及びプログラム改善方策の検討／「教養科目」改革の検証ー学生の履修動向と学びに着目してー

◎部会18：授業評価アンケートの新たな活用方法の模索／米国研究大学における大学院生を対象としたティーチング・ポートフォリオ作成支援に関する研究ー日本への示唆ー／佐賀大学におけるティーチング・ポートフォリオの取組み／ティーチング・ポートフォリオを活用した教育活動の振り返りー全学プロジェクトの立ち上げと組織的運営の課題ー

◎部会19：大学職員がプロジェクト・チームでイノベーションを創出するーSDP「大学

職員のための『大学変革力』育成講座」の試み—／大学職員によるキャリア授業の組織的開発／芝浦工業大学における SCOT プログラム—SCOT 学生にみられる成長—／芝浦工業大学における FDer 養成に関する実践報告

◎部会 20：初年次学生における成長要因の可視化に関する研究—多面的な分析手法を通じて—／初年次における「イグナイト教育 (IGNITE)」の展開—取り組みと学修効果・成果の検証—／プロジェクトアドベンチャーを初年次教育に導入するための試行／初年次大学生のメタ認知の伸長—情報基礎教育の前後での比較—

◎部会 21：社会に開かれた教育課程実現のための大学の PBL・高校のプロジェクト学習と高大連携の実践研究／理工系・医系大学における理想的教養教育の実践／研究志向型初年次ゼミにおける TA の活用による学びの促進—／東京大学「初年次ゼミナール文科」の独自性と汎用性—／東工大リベラルアーツ教育改革の実際—新入生の「立志プロジェクト」を中心に—

◎部会 22：いじめと評価について／お茶の水女子大学における高大連携教育の展望と課題／高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価—京都大学教育学部「教育研究入門」における実践 (1) —／高大接続を視野に入れた探究型初年次専門科目の設計と評価—京都大学教育学部「教育研究入門」における実践 (2) —

◎部会 23：IR 組織に関するアンケート調査 (1) —国立大学と私立大学の比較検討—／IR 組織に関するアンケート調査 (2) —私立大学の IR 組織における実態と貢献度の関係性—／女子大学ベンチマークの試み／日本の大学生のベンチマークデータ—大学 IR コンソーシアムの共通学生調査から—

◎部会 24：アクティブラーニングの推進と課題解決能力を評価するコモンルーブリック／看護学科 4 年生のための 健康教育設計・実践に関する授業改善の取り組み／看護教育における知識と経験の総合化のためのコンセプトマップ導入と評価—疾病論「眼」の授業を通して—／高校生の地域参画学習—その可能性と課題—

◎部会 25：学生の自宅学習を促す教育プログラム事業—教育補助員活用の効果—／英国オープン・ユニバーシティの学習者支援システム／LMS の利用状況から支援の必要な学生を見いだす試み／障害者支援に関する地域リソース・シェアリングに関する研究—EU-Net の概要と遠隔ノートテイク実験—

◎部会 26：大学教育におけるコンセプト・マップの活用による学術概念への発展の可視化—国際関係論の学習を事例に—／大学教育研究における実践知についての考察—アクション・リサーチの理論と実践から—／クラウド型クリッカーシステムが VOD 教材の利用方法に与える効果／レポート論題タキソノミー—論題のスコープに着目して—

◎部会 27：教員養成における「情報機器の操作」の授業の検討と改善／オンライン型講義における学生の受講動態分析—宮崎大学 e-learning プログラムを事例として—／TED を利用した英語によるオンラインディスカッション交流—学生アンケートの分析—／大学における ICT 利活用の導入状況の—考察—大学規模別の観点から—

◎部会 28：教員養成における卒業支援としての「学びのコミュニティ」構築に関する実践的研究／教育実習前 CBT の必要性と望まれる諸要素の検討—ソーシャルスキル、学習意欲、メタ認知に関する、教育実習前後における変化を通じて—／大学間連携による教員養成のための共同教育の実践／多様なグループ発表形態を取り入れた授業—国語教員志望学生による実践—

◎部会 29：日本人大学生の留学経験における成果をもたらす行動とその要因に関する実証的研究／英語で学ぶ秋田学—地域に根差したグローバル教育の挑戦—／グローバル社会に対応した大学教育とは—質問紙調査とインタビュー調査による大学調査の結果を踏まえて—／学科全員留学プログラムの評価

2. 参加者企画セッション

学生のノートテイキングから授業のあり方を考える—学生へのインタビュー調査をふまえて—／アクティブ・ラーニング・PBL による大学—高校の地域参画・社会参画教育—次期指導要領を活用したシティズンシップ教育、平和教育、ESD—／小規模大学における IR／MOST が育てる実践コミュニティ II—実践課題の相互支援を通して創発へ繋げるフェローの挑戦—／大学生の対人関係文化をふまえたコミュニケーション教育を探る／アクティブラーニングの評価のフロンティア／起業体験プログラムを通じたビジネス教育事例—リアルな PBL (Project based learning) —／新たなテクノロジーを教育実践に！—VR、ロボットなどをどのように授業で活用できるのか？—／教育実践が大学教員にもたらす越境性 (Transboundary) と多様性 (Diversity) ／授業実践事例と共に紐解くアクティブラーニング型授業の学習効果／学生の成長を可視化し、教育の質保証へつなげるために必要なこと／学生 FD 活動経験者が語る、学生参画型「活動」の提案—テレビ朝日系列番組『しくじり先生』になぞらえて—／FD・SD を促進する大学間連携ネットワークの役割 SPOD 事業の効果検証を事例として／BYOD による教育学習環境の変革に向けて

